

秋草の間と勅使の間

秋草の間と勅使の間は、三宝院の入り口近くにある 3 つの応接室の 2 番目と 3 番目です。

この伝統的な建築様式の標準的な様式に従い、部屋の位が上がり、床が高くなるとともに、部屋が小さくなっていきます。勅使の間が、入口から最も遠く、一番小さい部屋（10 畳）で最高位（床も最高位）です。

2 番目の部屋は、15 畳あり、日本絵画と詩の題目として長く使われてきた秋の七草から名付けられました。絵は長谷川等伯派の画家が描いたもので、勅使の間の襖に対象的に描かれる春を代表する竹や花を描いた絵も同じ画家の作品です。